追悼のことば

故東北大学名誉教授　元東北大学総長　西澤潤一先生の御霊前に謹んで追悼のことばを申し上げます。

先生は、昭和二十三年東北大学工学部を卒業され、大学院特別研究生を経て、昭和二十八年電気通信研究所助手、昭和二十九年同助教授、そして昭和三十七年に、弱冠三十六歳の若さで教授に昇任され、その後、二度にわたり電気通信研究所長を務められました。さらに平成二年十一月には、第十七代東北大学総長に就任され、東北大学をその傑出した力で先導されました。

平成八年十一月の本学総長退任後、平成十年からは岩手県立大学長、平成十七年から二十一年までは首都大学東京学長を務められ、我が国の高等教育を先頭に立って牽引されました。

ご活躍は教育界にとどまらず、多くの要職を務められ、宮城県からは名誉県民、仙台市からは名誉市民の顕彰を受けられています。

西澤先生は、本学が掲げる理念「研究第一主義」をまさに具現する研究者であられました。また、もう一つの伝統「実学尊重」についても、数々の成果を社会に還元してこられました。

先生の研究成果である、光通信の三要素、すなわち半導体レーザー、収束性光ファイバ、およびpinフォトダイオードは、光通信そしてインターネットに代表される情報化社会の基盤となっています。発光ダイオードなどに用いる化合物半導体の研究では、高輝度赤色LEDや純緑色LEDを実現されました。LEDは、長寿命で照明機器の省エネを実現していることは皆さまご承知の通りであります。さらに、高周波特性と高耐圧特性に優れた半導体デバイス、静電誘導デバイスの発明などをされ、先生は、まさに、現代社会を支える主要な科学技術を世に出されました。私たちの社会の礎となっている先生の研究成果は、科学技術史に燦然と輝いています。

先生は、国内では日本学士院賞、紫綬褒章、文化功労者、文化勲章、勲一等瑞宝章など数々の賞、褒賞を受けられました。また世界最大の学会のひとつ米国電気電子学会（IEEE）からエジソンメダルが授与されました。さらにIEEEは、先生のご業績を称え、エジソンとグラハムベルから始まる世界で十三人目のメダル、ジュンイチ・ニシザワ・メダルを創設いたしました。

先生が創設された財団法人半導体研究振興会は、半世紀もの間、半導体産業を牽引し、多くの人材を世に送り出しました。平成二十年の財団解散に際しては、土地・建物などを東北大学に寄贈いただきました。今日も、西澤潤一記念研究センターとして先生のご意志

が引き継がれています。

総長ご在任中は、大学設置基準の大綱化の下で改革を推し進められたほか、東北大学では初めての学部を持たない独立研究科として、国際文化研究科、情報科学研究科を設置されました。さらに、学際科学研究センター、東北アジア研究センターの設置など、いち早く学際分野の研究推進体制を整備されました。

また、先生は青葉山新キャンパスへの移転構想をとりまとめられました。その青葉山新キャンパスは、昨年、主要な部局の移転が完了し、新たな東北大学の顔として教育、研究、産学連携の拠点となり、次世代放射光施設の建設も予定されています。

このように、西澤先生は、先見性と比類なき判断力、卓越した手腕により、本学をとりまく幾多の困難を克服し今日へと続く発展を導き、極めて大きなご功績を残されました。

先生は、ご多忙な中においても、学生の行事に呼ばれれば必ず駆け付け、学生と大いに語らい、教職員に対しても飾らぬお人柄そのもので接し、まさに「ミスター東北大」と呼ばれる存在でした。私自身も、大学院生のとき、国際スクールの講師を務められた西澤先生から高輝度LEDの明るさを実際に見せていただきました。多くの学生が憧れる偉大なしかし身近な先生でした。

先生が残された言葉として、本日の次第では「眞理はすべて実験室にありて机の上には在らず」を紹介させていただきました。この色紙は西澤潤一記念研究センターで今も私どもが目にします。資源がない日本が歩むべき道は科学技術であり、その根源となる実験が適切で正確か考え抜き、実験を積み重ね、いまだやられていないことを発見する。このことが常識にとらわれない独創を生む。これがまさに、先生が残された「実験室にありて机の上には在らず」の意味であります。

いま、人類社会は、地球規模で克服すべき様々な複雑かつ困難な課題に直面しています。東北大学は、まさに西澤先生が体現された「研究第一主義」「門戸開放」「実学尊重」の理念・精神・伝統を継承し、発展させ、「社会とともにある大学」として人類社会の発展に貢献してまいります。

大学の変革期のさなか先生のご逝去には哀惜の念に堪えず、これからは直接のご指導を受けることができないことは誠に残念ですが、後を継ぐ者の努力による東北大学の更なる発展を是非とも見守っていただきたいと念じております。

ここに先生のご功績とご遺徳を偲び、心からご冥福をお祈りして追悼のことばといたします。

平成三〇年十二月十六日

東北大学総長　　大　野　英　男